

報道解禁（文化審議会文化財分科会終了後）

テレビ・ラジオ・インターネット

令和8年3月26日（木）17時以降  
新聞

令和8年3月27日（金）朝刊

担当課：文化財保護課

直通：092-643-3875

内線：5388

担当：野木（美術工芸品）  
松本（建造物）

## 国重要文化財（美術工芸品）の指定及び 国登録有形文化財（建造物）の登録について

- 国の文化審議会（会長 しまたに ひろゆき 島谷 弘幸）は、令和8年3月26日（木）に開催される同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、新たに46件の美術工芸品を重要文化財に指定すること、また新たに139件の建造物を国登録有形文化財に登録することについて文部科学大臣に答申する予定です。
- この中で福岡県関連の重要文化財（美術工芸品：歴史資料）は1件、国登録有形文化財（建造物）は4件です。官報告示後、福岡県内の重要文化財（美術工芸品：歴史資料）は計3件、国登録有形文化財（建造物）は計255件となる予定です。

[答申予定の重要文化財（美術工芸品：歴史資料）]

みつみいけたんこうせんようてつどうでんききかんしゃ  
三井三池炭鉱専用鉄道電気機関車 4両

にしみなとまち みかわこうあと  
（大牟田市西港町2-30 三川坑跡）

[答申予定の国登録有形文化財（建造物）]

なみおりじんじゃほんでん はいでんおよ へいでん てみずしゃ にのとりい  
波折神社本殿・拝殿及び幣殿・手水舎・二ノ鳥居 計4件

つやぎき  
（福津市津屋崎4丁目33-1）

【本件に関する問合せ先】

○美術工芸品（歴史資料）

福岡県教育庁教育総務部文化財保護課

担当：野木 電話 092-643-3875

大牟田市企画総務部世界遺産・文化財室

担当：小野 電話 0944-41-2515

\*本資料の写真画像提供を御希望の方は、大牟田市担当にお問い合わせください。

○建造物

福岡県教育庁教育総務部文化財保護課

担当：松本 電話 092-643-3875

\*本資料の写真画像提供を御希望の方は、当課担当にお問い合わせください。

福津市教育委員会文化財課

担当：田上 電話 0940-62-5093

\***報道関係者向け現地説明会**を3月24日（火）13時30分～15時 開催予定。

現地説明会の参加をご希望の方は、福津市担当にお問い合わせください。

## [重要文化財（美術工芸品：歴史資料）の説明]

### みついみいけたんこうせんようてつどうでんききかんしゃ 三井三池炭鉱専用鉄道電気機関車

員数	4両
時代	米・独 20世紀、大正・昭和時代
所有者	大牟田市

#### 概要

明治時代に官営を経て三井財閥の経営となった三池炭鉱は、平成9年（1997）の閉山まで日本屈指の採炭量を誇った。同炭鉱の石炭輸送は、明治41年（1908）の三池港竣工を契機に増強され、昭和戦前期にかけて段階的に専用鉄道の電化を進め、電気機関車を導入した。

本車輦群4両は、三井三池炭鉱専用鉄道で長年使用された車輦である。①15トン5号電気機関車は1908年米国ゼネラル・エレクトリック社製、②20トン1号電気機関車は1911年独国ジーマックス社製で、特に前者は鉱山用の電気機関車として現存国内最古級の車輦である。③20トン5号電気機関車は大正4年（1915）三菱合資会社製で、20トン1号電気機関車を模した国産最初期の電気機関車であり、④45トン17号電気機関車は昭和11年（1936）株式会社芝浦製作所製で、全ての部品の国産化を達成し量産された「東芝戦時形」の原形となる車輦である。

これら4両の電気機関車は、輸入した電気機関車を起源として国産化を図り、さらに大型電気機関車へと発展した日本の電気機関車の系譜を今日に伝える車輦群として産業史、鉄道史、科学技術史上に価値が高い。



① 15トン5号  
電気機関車



② 20トン1号  
電気機関車



③ 20トン5号  
電気機関車



④ 45トン17号  
電気機関車

## 〔国登録有形文化財（建造物）の説明〕

なみおりじんじやほんでん はいでんおよ へいでん てみずしや に の とりい  
波折神社本殿・拝殿及び幣殿・手水舎・二ノ鳥居

所在地 福岡県福津市津屋崎4丁目33-1

### 構造形式（建築年代／改修年代）

本殿 木造平屋建、銅板葺、建築面積 19 m<sup>2</sup>（明治 23 年／令和 3 年改修）  
拝殿及び幣殿 木造平屋建、銅板葺、建築面積 55 m<sup>2</sup>（大正 9 年／昭和 54 年改修）  
手水舎 木造、瓦葺、面積 4.7 m<sup>2</sup>（大正 11 年）  
二ノ鳥居 石造、間口 4.2m、高さ 5.5m（大正 9 年）

### 概要

波折神社は玄界灘に面した港町である津屋崎<sup>うぶすながみ</sup>の産土神であり、祭神は、瀬織津姫大神<sup>せ おりつひめのおおかみ</sup>、住吉大神<sup>すみよしのおおかみ</sup>、志賀大神<sup>し かのおおかみ</sup>の三神を祀る。社伝によると承久 3 年（1221）に現在地に遷座されたと伝わる。

本殿は、石積基壇<sup>いしづみきだん</sup>に建つ三間社流造<sup>さんけんしゃながれづくり</sup>で屋根は銅板葺<sup>どうばんぶき</sup>、四周に縁を廻らす。柱は円柱<sup>まるぼしら</sup>で組物は平三斗<sup>くみもの ひらみつど</sup>、軒は二軒繁垂木<sup>のき ふたのきしげだるき</sup>である。妻飾<sup>つまかざり</sup>は二重虹梁<sup>にじゅうこうりょうたいへいづか</sup>大瓶束<sup>おいがた</sup>で笈形<sup>からじし</sup>を付し、唐獅子<sup>きりん</sup>、麒麟<sup>はとうもん</sup>、波涛文<sup>はとうもん</sup>などの彫刻で飾る華やかな社殿である。棟札より明治 23 年（1890）の建築で大工棟梁は呉羽平右衛門棟重である。

拝殿及び幣殿は、大正 9 年（1920）の建築で、拝殿は正面三間、側面三間、切妻造<sup>きりつまづくり</sup>妻入銅板葺<sup>つまいり</sup>で、背面に両下造銅板葺<sup>りょうさげづくり</sup>の幣殿を接続する。拝殿正面には擬宝珠高欄付<sup>ぎぼしこうらん</sup>の縁を設け、一間向拝<sup>こうはい</sup>を付す。内部は一室の畳敷とし、上部は化粧屋根裏天井<sup>けしょうやねうらてんじょう</sup>で、二重虹梁<sup>にじゅうこうりょう</sup>を現した雄大なつくりである。

手水舎は大正 11 年（1922）の建築で、桁行一間、梁間一間、切妻造<sup>きりつまづくり</sup>棧瓦葺<sup>さんかわらぶき</sup>である。成の高い礎石<sup>せい</sup>に角柱<sup>かくはしら</sup>を四方転び<sup>しほうころ</sup>に立て、頭貫<sup>かしらぬき</sup>と内法貫<sup>うちのりぬき</sup>で固め、大斗肘木<sup>だいとひじき</sup>で桁<sup>けた</sup>と虹梁<sup>こうりょう</sup>を受け、虹梁上<sup>かえるまた</sup>の臺股<sup>むなざ</sup>で棟木を支持する。南に井戸、北に手水鉢<sup>てみずわ</sup>を配し、四方を吹放つ。小規模ながら境内景観に寄与する建造物である。

二ノ鳥居は大正 9 年（1920）に建築された石造<sup>みやうじんとりい</sup>の明神鳥居<sup>みやうじんとりい</sup>で、間口 4.2m、高さ 5.5m、花崗岩<sup>かこうがん</sup>の円柱<sup>うちころ</sup>を内転び<sup>ぬき</sup>に立て貫<sup>かざぎ</sup>で固め、頂部に笠木<sup>かざぎ</sup>と島木<sup>しまぎ</sup>を載せ、笠木と島木の全体に反りを付ける。拝殿及び幣殿の再建に伴い建立した丁寧なつくりの鳥居で境内景観を整える。

波折神社の本殿と拝殿及び幣殿は、造形の規範となる建造物として評価された。また手水舎と二ノ鳥居は、歴史的景観に寄与する建造物として評価された。



図1 波折神社位置図



写真1 波折神社本殿 外観  
(福津市教育委員会提供)



写真2 波折神社本殿 妻飾彫刻  
(福津市教育委員会提供)



写真3 波折神社拝殿及び幣殿  
外観  
(福津市教育委員会提供)



写真4 波折神社拝殿及び幣殿  
内観  
(福津市教育委員会提供)



写真5 波折神社手水舎 外観  
(福津市教育委員会提供)



写真6 波折神社二ノ鳥居 外観  
(福津市教育委員会提供)